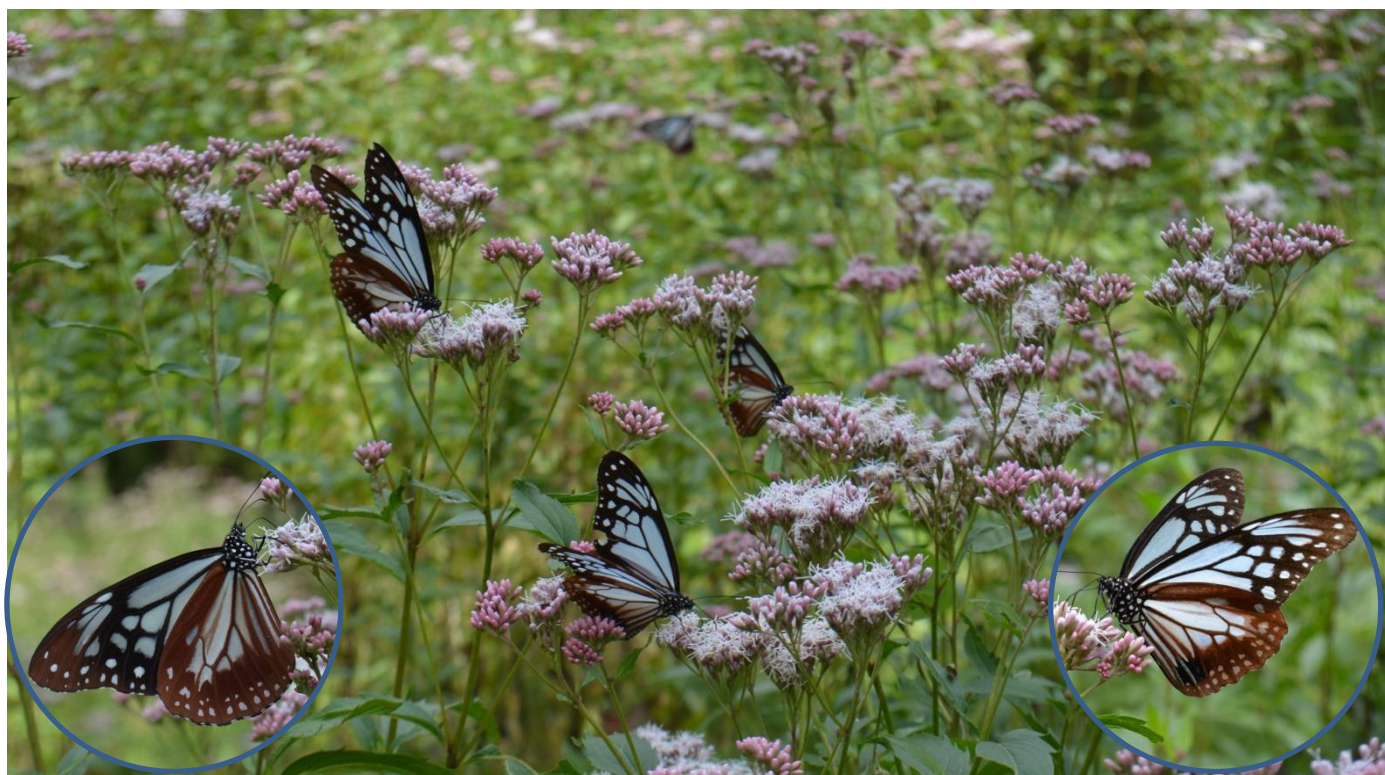


各 位

令和2年9月1日
山形市野草園 : 山形市大字神尾 832-3
電話 023-634-4120

山形市野草園からのお知らせ



フジバカマの蜜を吸うアサギマダラの雌(写真左)と雄(写真右) 【前年の9月上旬に撮影】

渡り蝶のアサギマダラ

9月になるとアサギマダラが野草園のフジバカマの花にやってきます。蔵王の山々で生まれ育ったアサギマダラが南の方に移動するとき、その一部が野草園を通過していきます。アサギマダラの雄は成熟するためにフジバカマの蜜を吸う必要があります。雌を惹き付けるフェロモンを作るために必要な物質が、その蜜の中に含まれているからです。雄と雌の区別は後ろ羽の外側で出来ます。羽の茶色の模様の下の所に黒い斑点があるのが雄です。雌にはありません。ここで十分蜜を吸ったアサギマダラは、また次の蜜を求めて南への旅に出発します。

フジバカマ (キク科)

フジバカマは、遠く奈良時代に中国から渡ってきた帰化植物と考えられています。花の色が藤色で、花卉の形が袴（はかま）のようであることから、花の名がつけられたようです。万葉の時代から知られる秋の七草のひとつで、派手さはないけれども郷愁を感じさせる花姿が愛されてきました。かつて、関東平野や大阪平野の川べりや土手に多く自生していましたが、護岸工事や開発などで野原に群生する姿はほとんど見られなくなり、現在は準絶滅危惧種になっています。蔵王にはフジバカマの仲間のヨツバヒヨドリが群生しています。

野草園の「七草の庭」ではオミナエシやフジバカマ等の秋の七草の花が咲き誇り、渡り蝶のアサギマダラの写真を撮るカメラマンの姿が見られるようになります。アサギマダラは美しいばかりでなく、人を恐れないので近づいても逃げません。いい被写体といえます。是非、フジバカマに集まるアサギマダラを撮影しにいらっしやてください。9月下旬まで見られます。

《 屋内施設再開のお知らせ 》

「自然学習センター」と「カフェやまぼうし」は7月2日から再開しています。

換気や人が触れる物のアルコール消毒を十分におこなっています。また、テーブル、イスを減らし、十分な間隔を取れるようにしています。

「カフェやまぼうし」木曜日・土曜日・日曜日・祝日に営業

営業時間 午前11時～午後2時

来園前にホームページ又はお電話でご確認ください。

(<https://www.yasouen.jp>) (023-634-4120)

8月末～9月前半のイベント

※ 年度当初予定していたイベントは、新型コロナウイルス感染症対策のため、ソーシャル・ディスタンスを保つのに難しい内容のものは今年度は中止することにいたしました。が、下記の作品展及び写真コンテストは、自然学習センター内での換気や消毒の徹底、ソーシャル・ディスタンスを守るなどの対策を徹底しながら実施いたします。

◆東北南3県ポタニカルアート作品展

○日 時 8/30(日)～9/27(日) ※8/30は午後1時から、9/27は午後3時まで

○場 所 自然学習センター

○内 容 ポタニカルアート愛好者の作品約140点を展示、杉崎文子氏が描いた世界に一本の貴重なミヤマカスミザクラの作品も展示

◆第27回野草園の魅力を探る写真コンテスト作品募集 9/15(火)～10/2(金)

○内 容 令和元年10月以降に園内で撮影した作品を募集 審査：10/7(水) 予定

◆◆◆9月前半に見られる主な花たち◆◆◆



オミナエシ(スイカズラ科)

日当たりの良い山野に生える多年草で、「秋の七草」として知られています。葉は対生し羽状に分裂します。茎は上部で枝分かれし、黄色の小さい花を多数つけます。花の名前のオミナは“女”、エシは“飯”が訛ったことばで、花の様子を粟飯に例えています。



ハナトラノオ(シソ科)

北米原産で大正時代に渡来した草丈60～120cmの多年草で、茎は角張りピンク色の花の総状花序が直立します。1つの花は唇形で下から上へ順に咲いていきます。総状花序が虎の尾のようにやや長く、花が美しいことが花の名の由来です。



ウゼントリカブト (キンポウゲ科)

東北奥羽山脈を中心とした山地帯に生える多年草です。草丈50～180cmの茎の上部に青紫色の花を付けます。花弁に見えるのは萼片で、その中に細長い花弁が2枚あり、奥には距という部分があり蜜が分泌されます。雄しべと雌しべは入口の下側にあります。強い有毒植物です。



ツリフネソウ (ツリフネソウ科)

山野の水辺に群生する草丈30～50cmの1年草で茎の先に数個の花がぶら下がります。花は紅紫色で距が著しく後ろに突き出て渦巻き状になります。花弁は3個で下は2個がくっついて唇弁になり、距がある袋は萼片です。花の形が花器の釣舟に似ていることが、花の名の由来です。



シュウメイギク (キンポウゲ科)

花びらのように見えるのは萼片で、花弁は退化しています。名は、秋に菊によく似た花をつけることによります。しかし、本種は菊の仲間ではなく、キンポウゲ科アネモネの仲間です。本来赤紫色の花ですが、白色の品種が多く栽培されるようになりました。



ワレモコウ (バラ科)

山野に普通に生える多年草です。花は楕円形で、上から下へと開花します。花は花弁がなく4枚の萼片が花弁のように見えます。萼片は暗紫色で雄しべは4個で葯は黒く萼片より短いようです。花の名は紋所のモコウからきたものといわれています。



アキノノゲシ (キク科)

日当たりの良い荒れ地や草地に生える草丈0.6～2mの1～2年草です。下部の葉は羽状に裂けますが、上の葉は小さくて全縁です。茎の上部に円錐状に淡黄色の花を数個付けます。花は昼間開き夕方にはしぼんでしまいます。



センニンソウ(キンポウゲ科)

山野などの土地に生える多年生のつる植物です。茎は長く伸びてまばらに分枝し、葉と同様に無毛です。葉は対生、奇数羽状複葉で3～7枚の小葉があります。葉の腋に白色の花を多数つけます。萼片は4枚で十字形に平開し、それが花弁に見えます。伸びた花柱は白色の羽毛状になり、それが仙人のヒゲを連想させます。



タイワンホトトギス(ユリ科)

沖縄県西表島、台湾などの亜熱帯地域の山地や森林の湿った場所に自生し、高さ30～50cmになります。和名は、斑点が入る花を、鳥のホトトギスの胸の模様に見立てたことに由来します。本種はタイワンホトトギスと本州・四国・九州に自生するホトトギスの交雑種と思われる。



カリガネソウ(シソ科)

山地や林縁に生える草丈1m程の多年草です。独特な臭いを出すので近くに行くだけで気づきます。花は下側の唇弁が大きく、4個の雄しべと雌しべは共に長く下向きに湾曲します。花の様子を冬の渡り鳥の雁(かり)の飛ぶ姿に例えたことが、花の名の由来です。



ゴマナ(キク科)

山野の日当たりの良い所に生える多年草です。草丈が1～1.5mで茎や葉に細毛があり、触るとざらつきます。茎の上部で散房状に枝を分け、白い小菊のような花を多数付けます。白い花弁は舌状花で中心の黄色いところは筒状花です。名前は葉が“胡麻”の葉に似ているところからきているようです。



ナツスイセン(ヒガンバナ科)

観賞用に栽培されるほか、日当たりの良い草地に自生している多年草です。細長い葉は早春に伸びだし、地下の鱗茎に栄養を貯め、初夏には葉が枯れてしまいます。夏には60cm程の花茎を立ち上げ茎頂にラッパ形のピンクの花を数個咲かせます。名前は葉がスイセンに似ており夏に花が咲くからのようです。



アケボノソウ(リンドウ科)

山野の湿り気のあるところに生える2年草で、花は深く5裂しているのが特徴です。裂片には黄緑色の蜜腺溝が2個と濃緑色の斑点が多数あります。この白い花弁を明け方の空に、斑点を星々に見立てたことが、「曙草」の名前の由来です。



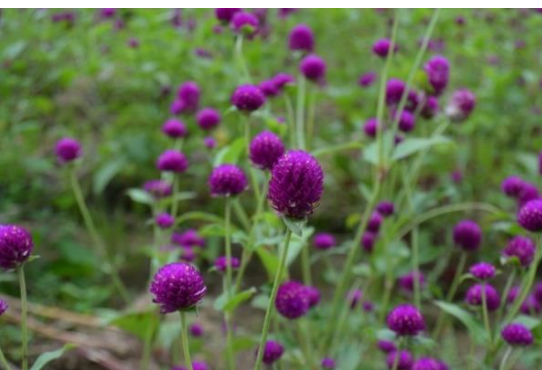
サラシナショウマ(キンポウゲ科)

落葉樹林内や草原などに生える多年草です。茎の先に総状花序を出し、柄のある白い小さな花を密につけます。花には両生花と雄花があり、萼片は楕円形で早落します。名は晒菜升麻で、若葉をゆでて水でさらして食べることによります。根茎は肥大し、乾かしたものは生薬の升麻(しょうま)で解毒・解熱剤などに使用されました。



オオケタテ(タテ科)

昔、日本に渡来した植物で、観賞用に植えられている高さ1~2mの大形の1年草です。直立した太い茎に、紅紫色の小花を穂状につけ垂れ下がります。小花の丸い5個の花弁状のものは萼片です。茎に毛が密生し、背が高いことが花の名の由来です。



センニチコウ(ヒユ科)

古く日本に入ってきた園芸用の草花で、熱帯地方原産の1年生草本です。茎の先に長い花茎を出し、その先に1個の球状の花をつけます。花は色のついた翼のある2個の小苞に包まれた多数の小花からできていて、小花は普通紅色ですが、淡紅色、または白いものがあります。花の名は、花が長持ちすることからきています。



ツルボ(キジカクシ科)

山野の日当たりの良い所に自生する多年草で、ニラに似た長線形の葉を出します。高さ20~40cmの花茎を立ち上げ、分岐せず茎の先に多数の小花を穂状につけ、下から上に咲いていきます。ツルボの球根の外皮をとると、つるりとした坊主頭に似せ、「ツルボウズ」から転訛して「ツルボ」の名になったといわれます。